

「僧侶が布施を受けるとは」 旧統一教会問題を考えるⅡ

宗教の目的は「抜苦与楽（ばつくよらく）」、苦悩を払い生きる喜びを得ることです。

さて、全ての宗教教団においてその経済的基盤は信者からの喜捨・布施・献金で成り立っています。仏教教団のお寺も、開祖以来現在に至るまで信徒からの布施で支えられてきました。著名な観光寺院や都市部の不動産業を行っている一部の寺院以外は、葬儀・法事・年中行事でのお布施で宗教活動を行い、伽藍を維持し、住職家族の生活をまかなっています。その布施について、お釈迦様は信者から寄進を受ける者の心構えとして「蜂が花の蜜だけをいたでいて、花そのものを損なわないように」と示されました。献金や献身によって信者の生活が脅か

されてはいけないというのです。

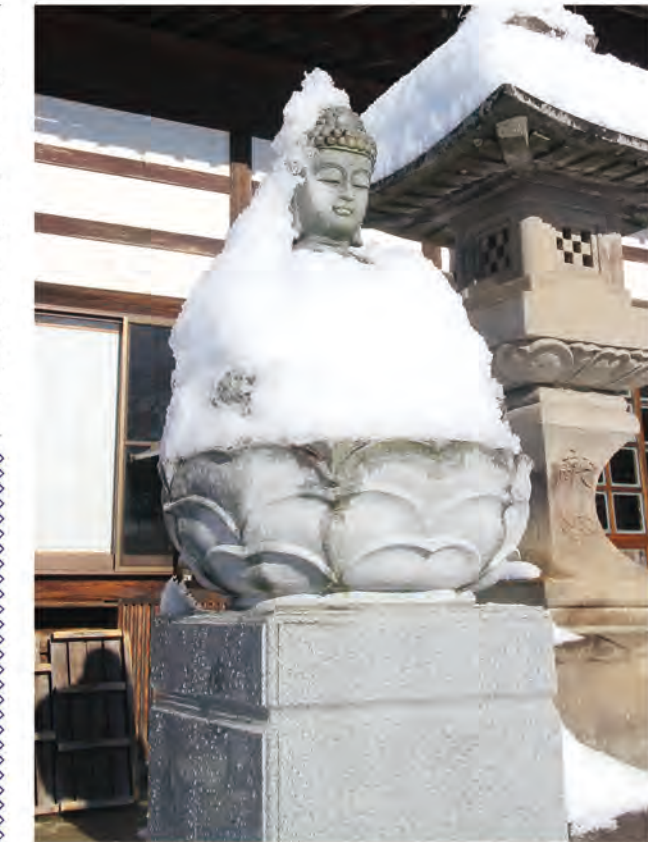
それでは私どもがいたでているお布施と今問題になっている旧統一教会の献金はどんな違いがあるのでしょうか。旧統一教会は信心を強要し、その信心の深さは献金の額によって決まるとしてより過度の献金を信者におおっていました。

仏教でいう布施はお金や物だけでなくあります。無財の労働奉仕も他者への親切も立派なお布施と考えます。

さらに、本来、布施は施主が自らの意志とする喜捨であるべきです。また僧侶への布施を読経という宗教行為の労働対価ととらえるべきではありません。だからこそ真心からのお布施はその多少にかかわらず尊くありがたいのです。

「貧者の一灯」というお釈迦さまの故事から生まれた言葉があります。昔、インドの王が沢山の灯火を用意してお釈迦さまの説法の会場を明るく照らししました。それを見た一人の貧しい老女が、自分もお釈迦さまに何かしてさしあげたいと思い、お金を工面して一本の灯火を供えます。王の灯火は徐々に消えていきましたが、真心からの老女の灯火はいつまでもお釈迦さまを照し続けたというお話です。

寺報いづみ掲載の「功德の施主」でお判りのとおり時に思いも寄らない寄進を受けることがあります。ある方は故人の供養のために、ある方は建物の保全のために、ある方は灯明代に、ある方は故人の遺言だったのか、またある時はお寺の郵便ポストに差出人名のないのし袋が…施しを下さった一人一人のこころを慮り、その方の願いや想いを共にするとき、僧侶として



て本当にありがたい仕事をさせていたでていると心から感謝の念が起こります。同時に、自分はこのお布施をいただくのに値する存在なのか、お布施をいただくだけの行いをしているのか、お前の信心は本当なのかと、わが身に問いかけます。そして、今まで以上に、教えを学び、祖師方を尊び、他者に寄り添い、仏の教えを通して「抜苦与楽（ばつくよらく）」の役割を果たしていかなければと強く思います。

旧統一教会の献金問題は改めて一僧侶としての自らを振り返る機会になりました。檀信徒の皆さんが寺や僧侶をどう見ているのか、どう思っているのか、その想像力の大切さも判りました。忙しい日送りにあっても、時折、これで良いのか、これで良いのかと、自らを省みる機会を持ち続けなければと自戒します。仏教寺院としての自覚と責任のもと、檀信徒の皆さまから「仏教徒でよかった」「私の菩提寺は信頼できる」と言っていただけでもよいから

今年も「お寺・介護者カフェ」
実施します

二年前、石川町在宅介護支援センターの依頼で始まった家庭で介護を担う方々を対象にした「お寺・介護者カフェ」は現在長泉寺主催で実施しています。午前10時から檀信徒会館でお茶や珈琲を飲みながらしばしおしゃべりタイム、その後本堂で形にとらわれな

い楽な姿勢での椅子坐禅。短時間の坐禅ですが心がスッキリして元気がわいてくること。今年度も季節の変化を楽しみながら四回実施します。参加費は無料です。



長泉寺梅花講は七年目に入りました。令和五年は降誕会、成道会、涅槃会に加え新盆法要で奉詠、県大会にも参加しました。御詠歌にはお経とは別の力があります。わかりやすい歌詞と心にしみるメロディで、亡き方のご供養だけでなくご家族を慰め、私たちにも癒しのひとときとなります。



▲梅花講成道会（令和5年12月6日）

カール・ベッカー先生の葬儀研究

京都大大学院カール・ベッカー特任教授は「日本人の死生観」についての研究者です。この度、家族を亡くした千人超の遺族から聞き取り調査をし、「社会経済から見た葬儀の研究」というテーマで発表しました。

かけがえのない大切な人を亡くしたとき悲嘆にくれて仕事がかたどらず、病気になるやすくなり、医療費にも影響する。逆に、納得いく看取りや、葬儀に十分満足できた場合、人の心は

葬という火葬式だけの簡単な葬儀をしてしまえば後悔やまされてしまう人もいます。なかにはカウンセリングを受けたり、医療機関に足を運ぶようになる人もいます。等々。

人の心というものは割り切れないのです。死別の悲しみをどう乗り越えるのか、悲しみにある他者にどう接するか、これまで多くの方々が研究していますが、カール先生の研究は葬儀後の家族の健康や医療などさらには現実的な社会経済の問題に着目した点で注目されました。